

## ■特定課題セッションⅡの報告

### 「性的マイノリティをめぐる課題から社会福祉学を再考する」

コーディネーター：宮崎理（明治学院大学）

本セッションでは、単なる現状分析や実践紹介の次元にとどまることなく、性的マイノリティをめぐる課題が社会福祉学にどのような論点をもたらすのかを明らかにすることを目的とした。議論を通じて目指したのは、社会福祉学から性的マイノリティをめぐる課題を検討するのではなく、性的マイノリティをめぐる課題から社会福祉学を再考する契機をつくることである。そして、そのことによって社会福祉学の理論研究全体の活性化に寄与することを志向した。

まず、大山治彦会員からは「SOGIに敏感な視点による社会福祉（学）に向けて」と題し、今後の社会福祉学には、SOGI主流化が求められることが論じられた。そして、そのことは、これまで自明とされてきた概念や方法などの見直しを迫るものであり、社会福祉学に関わるすべての人びとに影響を与えるものであることが指摘された。

つぎに、佐々木幸会員・北島洋美会員からは「介護施設・事業所職員の性的マイノリティ利用者に対する意識」と題し、介護施設・事業所職員の性的マイノリティに対する意識や対応の実態を明らかにすることを目的に実施した調査の結果が報告された。性的マイノリティに対する単なる「配慮」の必要性といった表面的な議論ではなく、対人援助職に従事する者の実存的な葛藤や、そもそも個人の尊厳を守るとはどのようなことなのかといった本質的な議論が必要であることが示唆された。

そして、長澤紀美子会員からは「トランスジェンダーのトラウマ経験：ソーシャルワーク教育におけるトラウマ・インフォームドケアの有用性の検討」と題し、トランスジェンダーに対するトラウマ・インフォームドケアによる支援の有用性や導入の課題が検討された。個人の経験に焦点を当てながらも、非政治化や新たな病理化をいかに避けるのかといった問いが生じることが指摘された。

共同討議では、非常に多くの様々な論点が生じた。本セッションを通じて明らかになったことは、他の学問分野に比して、本テーマに関連した議論が社会福祉学では極めて不足しているということである。ともすれば、既存の社会福祉学や社会福祉実践のありようはそのままに、性的マイノリティの経験を個人主義的に解釈し、抑圧を生み出す社会構造にアプローチするのではなく個別のケアに収斂しかねない現状がある。そうした現状がなぜ、どのようにして生じているのかを捉え、抑圧の構造的要因をつくりだしてきた側でもある社会福祉学のありようを再考することの必要性があらためて浮き彫りとなった。